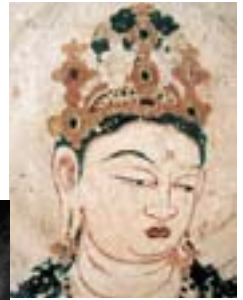


悪夢は、一九四九年一月二十六日の朝におこった。金堂から出火した炎は、わずかの間に内陣と壁面を焼く。茫然自失の人々の中、管主佐伯定胤は、炎に包まれた内陣にとびこもつとして抱きとめられた。焼けただれた十号壁の前にたたずむ佐伯。合掌瞑目ののち、彼は「形あるものは滅す」とつぶやいたという。その絶望は想像に余りある。それは、足かけ十年におよぶ模写作業をしてきた人々も、同じだった。保存のための作業が、結果、壁面を失ってしまった自責、世間の激しい非難。残った模写と資料からの再現が、ここから悲願となった。残ったのは、一九四〇年からの模写事業で、完成間近だった模写八面。壁面十二面を、分割撮影した写真原版三七四枚。幸運にも四色分解でひそかに撮影されていた、十二面全景の原色原版。そして明治時代の桜井香雪、大正・昭和の鈴木空如の模写などだった。

九六八年五月二十一日、東京国立博物館で「金堂壁面再現記念法隆寺展」が開幕した。悪夢の火災から十九年、金堂壁面が再現模写としてよみがえった瞬間だった。日本の文化財保護史上、その焼損は一大痛恨事だったが、それゆえにまた再現事業も最大のものとなった。この歴史的事業に、本学の日本画陣は総力をあけてとりにくんだ。



上：『金堂壁面再現記念法隆寺展』カタログ 東京国立博物館 1968年



左：金堂火災の鎮火後、十号壁の前にたたずむ佐伯定胤 1949年

東京芸術大学美術学部1968年

法隆寺金堂壁画の再現

佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『日本美術 誕生 近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術 美の政治学』

それから十七年たった一九六六年、ついに再現事業が決定する。新たに安田毅彦、前田青邨、橋本明治、吉岡堅一を主任に、四班十四人の体制がくまれた。安田、前田は、すでに本学を退官し、名誉教授。現役教官から教授吉岡堅一、助教岩橋英遠、講師吉田善彦・稗田一穂、平山郁夫が参加した。

綿密な打ち合わせを経て、模写は、制作当初への「復元」模写ではなく、焼損時への「再現」模写とすること。再現は、金堂の白壁に直接描くのではなく、和紙に描いて木枠に貼ったものを壁面にはめること。和紙には、まず写真原版を薄く印刷し、それに描きこんでいくこと、といった基本方針が決定された。

作業は、翌六七年春から各班いっせいに始まった。しかし最大の難関は、実は完成までわずか一年という、制作時間だった。ここから、各班はときに不眠不休の一年が始まる。十四人以外にも、多くの助手が参加した制作



スタッフは、総勢約五十人。各アトリエの熱気に満ちた一年間は、まさに一大事業というにふさわしいものだった。試算によれば、制作のべ時間は、じつに十二万時間だったという。十三年四月月にあたる。各壁は共同制作だったが、三号壁の観音だけは、当時まだ三十七歳の若さだった平山郁夫現学長が、単独で仕上げたという。

東博で記念展が開催された一九六八年は、文化財保護委員会が、文化庁となった年だ。この再現模写は、威信をかけた事業だったはずだ。一方、一九一三年に没した岡倉天心が、最後に出席した古社寺保存会の会議で建議したのも、実は「法隆寺金堂壁面の保存」だった。満場一致の可決を見届け、自宅にもどつてすぐ、天心は最期の床につく。焼損はたしかに悲劇だったが、廃仏毀釈や戦争などで、幾多の文化財の悲劇を見てきた天心であればこそ、再現の努力も正しく理解したかもしれない。

(さとう・としん/美術学部芸術学科助教授)

タイムカプセルに乗っ

東京芸術大学音楽学部1969年

ステューデント・パワーと「芸術祭」

瀧井敬子

音楽学（ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究）主要論文「幸田露伴と音楽、そして妹の延」「東西音楽の接点 音楽におけるジャポニズムの一段面」「森山外訳《オルフェウス》をめぐる一考察」

一九六〇年代後半、いわゆるステューデント・パワーの嵐が欧米諸国で吹き荒れ、少し遅れてそれが日本にも伝播してきた。

アメリカでは黒人問題に絡んだ大学の諸問題や大学運営に対する「学生参加」などがすでに社会問題化しており、イギリスでは学生数の急増に伴って大学にマスプロの教育の問題が山積して、もう爆発寸前であった。フランスでは学生たちは大学の主体は自分たちになるべきだとか、哲学者サルトルも加わって、百花繚乱の議論が始まり、「五月革命」（一九六八）に至った。イタリアでもドイツでも封建的・官僚的・父権的社会をくつがえし、「自由な解放された社会を！」という運動が高まった。こうして大学紛争は、欧米を一大運動の坩堝に投げ込んだのである。

日本の大学も多くの問題を抱えていたし、今よりはる

かに政治運動も盛んであった。一九六八年頃からステューデント・パワーは激しさを増し、多くの大学で学生たちは大学当局と対立、バリケード封鎖や機動隊導入などが毎日の新聞を賑わせることになった。そのもっとも象徴的な出来事は、学生による東京大学安田講堂占拠と一九六九年一月の機動隊導入による「落城」であろう。八月になると自民党の強行採決で、大学の運営に関する臨時措置法が成立、一年以上紛争を続ける大学は廃校にされることになった。それでもいくつかの「紛争重症校」では、秋になっても学年試験の妨害や教室封鎖などが続いたが、この法律によって、各大学の紛争は一応おさまる方向に向かった。しかし、紛争中に提起された問題はほとんど未解決のままになってしまったようである。

東京芸大は、こうした波にさほど呑み込まれずにすんだ。一九六九年九月の「芸術祭」は例年どおり行われた。当時の福井直俊学長はパンフレットの冒頭の挨拶で、「今年もまた恒例の芸術祭が若き学生諸君によって催されることは、正常な授業さえできない多くの紛争大学のあることを思えば、誠に喜ばしいことである。このよう

な大学をめぐる色々な激動の中で、やゝすると我が足もとを見失いがちである」が、そうしたなかに、芸術祭を実現させた学生の努力に敬意を表したい、と語っている。一方、企画に携わった学生代表の文章を見ると、「天翔る反動の黒雲の下に、日本の独立・平和・民主主義を闘いとろう」とする運動が今起こりつつあり、これこそ「人間性回復の努力の具体的な姿」と、元氣よく宣言している。学生たちは、前年度の統一テーマ「現代この虚像と実像のなかで、我々はどこへ行く」とするの

か」を深めたいとも高らかに叫んでいる。彼らは芸術家の卵として、自分たちの根本的な立場について立ち止まって考えたことであろう。とはいえ、パンフレットを見る限りでは、残念ながら観念的なスローガンの羅列のみで具体的な提案は見られない。

それから三十年以上を経た昨今、「芸術祭」は、上野の地域社会や商店街の皆さんと手をつなぎ、楽しい「祭」となっている。やはり現実には、観念的な想像を軽々と越えて、着実に進行しゆくのだなあ、との思いを深くする。



上：1969年度芸術祭のポスター「訴えかける手、手、手……」
左：2003年度芸術祭のポスター（美術学部デザイン科2年 三浦遊）
下：2003年度芸術祭「マリイシティ上野」における「野郎クラリネットカルテット」

